

聖書:使徒の働き21章15～30節

説教:すべての人の奴隷となる

はじめに

パウロが三回目の伝道旅行を終えてエルサレムに戻る途中、行く先々で兄弟たちから何度も行くべきではないと忠告を受けます。エルサレムで待ち構えているユダヤ人たちがパウロを捕まえ、ひどい目にあわそうとしている。御霊によってそのことを知らされたからでした。しかしパウロは、「私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています」と言っ

て、忠告を聞き入れる気配がない。そこで人々は「主のみこころがなりますように」と言ってパウロを送り出します。それが前回までのあらすじでした。

今日の所を読むと、まさに心配したとおりのことが起きてしまっています。「だからあれほど言ったのに」と嘆き、パウロは失敗したと決めつけたくなるところですが、本当にそうでしょうか。ここにも主のみこころが働いているはずです。それはなんであったか。ともに考えてまいります。

1 宣教報告

パウロがエルサレム行きを強く希望していたのは、伝道旅行の様子を直接自分の口で報告したいという目的もあつてのことでした。19節。「彼らにあいさつしてから、パウロは自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明した。」パウロは、異邦人に福音を伝えるために地中海に点在する町々を尋ね歩きました。そこでどれだけ苦労があったかは、これまで見てきたとおりです。でもパウロはここでなんと言ったか。「神が異邦人の間でなされたこと」と言っている。実際に活動したのはパウロなのですが、「私がこうしました、ああいうこともしました」とは言わない。神がなされたと言う。その神がなさることについて、自分はただ奉仕しただけです、手伝ってきただけなのだというのです。

こんな場合、自分がパウロだったらどんな報告をするのでしょうか。「私はエペソの教会を建て、そこで数百人の信者を獲得しました。ユダヤ人から石で殺されそうになったときのこの傷も見てください。とても苦労したんですよ。」いつの間にか自分の自慢と苦労話になっていく。確かにパウロがしてきたことは誰にもできることではありません。でも彼はそんなことは誇りません。これはすべて

神がなされたわざですと言うのです。どうしてこのように謙遜になれるのでしょうか。このことはまた後で触れることにします。

2 二つの誤解

1) 誤解1: パウロはユダヤ人に間違っ

たことを教えている

このとき、エルサレムにはすでに何万人ものユダヤ人クリスチャンがいたようです。イエスの十字架からまだ二十年ほどしか経っていないのに、こんなに大勢の人たちが救われたと知ってちょっと驚きます。そのユダヤ人クリスチャンは、小さなときから律法を守るようにと教えられてきていました。子どもが生まれれば八日目に割礼を施し、定期的にいけにえをささげ、決められた祭りを守っていた。そんな彼らがクリスチャンになったとき、律法はどうしたか。身についた習慣をすぐに止めることはできません。教会は、ユダヤ人の信仰を尊重するという立場をとり、今までと同じようにしてよいですと教えました。その一方で異邦人には、25節に書かれている注意事項さえ守るならユダヤ人の律法を守る必要はないとも教えていた。

じつはこのことが、信仰を持たないユダヤ人たちから強い批判をまねく要因となります。パウロはユダヤ人に対してモーセに背くことを教えている。つまり律法を守る必要はない。そのように教えているとのうわさが広がった。もちろんこれは誤解で、いまならフェイクということになる。ところが嘘でもフェイクでも、声高に叫び続けるといつの間にか”真実”となって一人歩きしてしまうところが恐いのです。

2) 誤解を解くために

長老たちはパウロのことを心配し、なんとかユダヤ人の誤解を解きたいと考え、次のような提案をします。23, 24節。「ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に、誓願を立てている者が四人います。この人たちを連れて行って、一緒に身を清め、彼らが頭を剃る費用を出してあげてください。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、皆に分かるでしょう。」つまりこういうことです。パウロがモーセの律法に背くようなことは教えていない、

そのことをきちんとアピールしようというのです。ちょうど四人の人が誓願を立てていたけれど、もうすぐ誓願の期間が終わるので、しきたりにしたがって頭を剃らなければならない。パウロがその費用を出して上げれば、パウロもちゃんと律法を守っていると皆が理解してくれて、誤解も解けるだろう。これが長老たちの考えたことで、パウロはこれにしたがうことにしました。

3) 誤解2：パウロは異邦人を宮に連れ込んだ

ところがここでまた問題が起きてしまう。ユダ人は、神聖なる神殿に異邦人が入ってはならないと厳しく指導していた。ところがパウロがギリシヤ人を宮の中に連れ込んでみると、あるユダヤ人のひとりが叫んだ。もちろんパウロはそんなことはしていません。またもうひとつ誤解されてしまった。

しかしいくら誤解だと言ってもおさまらない。人々が殺到してパウロを捕らえ、宮の外に引きずり出してしまいます。心配していたことが現実になってしまいました。このあとパウロはローマ軍の手に捕らえられ、幽閉状態に置かれ、やがて裁判を受けるためにローマへと護送されていくことになります。

3 パウロの信仰

1) ユダヤ人にも異邦人にも

パウロは、イエスの名のためなら死ぬことも覚悟しています。ユダヤ人の前に出ても、下手な小細工はしない。パウロはここにいる。早く捕まえて煮るなり焼くなり好きなようにしろ、とは言わなかった。その代わり、長老たちの意見に従って、パウロもモーセの教えを守っているのだと、ユダヤ人にアピールしようとした。パウロも殺されるのは恐かったのか。とにかく事を荒立てず、騒ぎにならないように、それだけだったのか。

もちろん進んで事を荒立てようというのではありませんが、パウロは全然別のことを考えています。一体何を考えていたのか。参考になるのは、第一コリント9章19, 20節です。「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。」

パウロはなにを考えていたか。たとえユダヤ人から怒りを買って殺されることになったとしても、

まだイエス・キリストを信じていないユダ人を獲得したい。そのことだけを考えていました。誓願を立てている人たちと一緒に身をきよめたり、頭を剃る費用を出したりしたのは、自分の身を守るためではなかった。多くの人とを獲得するためにユダヤ人にはユダヤ人のようになる。ただそのために一緒に身をきよめたのです。

パウロは、イエス・キリストに出会うまでは、若きパリサイ派のリーダーとして、律法を厳格に守ることにかけてはだれにも負けないくらい自信をもっていた人です。しかしキリストに捕らえられたその瞬間、彼は律法から自由になりました。もう細かな習慣を守る必要はないと思っている。しかユダヤ人を獲得するために、いま、自分も身をきよめ、頭を剃る費用を出し、律法を守るのだと言っているのです。自分の身を守るために、こそこそとモーセの教えを守るふりをしていたのではなかったのです。

2) イエス・キリストの名のために

でもパウロは捕まってしまいました。せっかくユダヤ人を獲得するためにユダヤ人のようになったはずなのに、いったいどのようにしてユダヤ人に福音を語ろうというのでしょうか。こうなってしまうては何もできない。口では格好いいことを言っていたけれど、結局失敗だったのではないか？

いいえ、終わっていません。もしろこれから新たな働きが始まります。今日は開きませんが、22章ところでは、パウロは大勢のユダヤ人を前にして、自分がどのようにしてイエス・キリストに捕らえられ、主を信じるようになったのか証ししています。ローマ提督の前に連れ出されたときも、ローマに船で送られる途上でも常に主を証し続けていきます。パウロは三回の伝道旅行をしたと言われていますが、そうではない。彼はこれから四回目の伝道旅行に出かけようとしているとも言えます。もちろんこれまでの伝道旅行とは違います。ユダヤ人たちやローマ提督によって決められた場所に引かれて行く、まったく自由を奪われた伝道旅行です。これはまさにパウロ自身が語ったそのものです。「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。」

3) 低くなられたイエス・キリストを見上げる

パウロの姿からイエス・キリストのことが浮かび上がります。主も同じような道をたどられました。ユダヤ人の怒りを一身に受けて、「十字架につけろ」の大合唱がの聲がとどろきわたると、ポ

ンテオ・ピラトは自分の身を守るために、イエスを十字架につけると宣言します。この世界を造られ、何者にも縛られず、最も自由である方がなぜ十字架にまで従われるのでしょうか。パウロが言いました。より多くの人を獲得するためです。一人でも多くの人を赦し、多くの人を天の御国に招くために、この方は私たちの前でへりくだってください、小さな姿となりました。パウロは、この奴隷の姿となられたイエス・キリストに出会いました。この方がどれほどに自分を愛して下さっているかをよく知っている。そのイエスの名のためならばということで、努力して奴隷になろうとしたのではない。「自然に」奴隷になれた、と表現したほうが正しいかもしれない。だから宣教報告のときも、自分はただお手伝いしただけですと自然に言える。

パウロだけが特別に愛されたのではありません。私たちがイエスからいただいている愛は、パウロとまったく同じです。ただその愛がよくわかっているのか、ぼんやりとしかわかっていないのか。その違いがあるだけです。この方からいただいている愛のすばらしさを少しでも近づくことができるようにと願いながら、またこの一週間を歩んでまいります。